

SPARC T5-4 サーバー

設置ガイド

Copyright © 2013 , Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

1. このドキュメントの使用方法	7
プロダクトノート	7
関連ドキュメント	7
フィードバック	7
Oracle サポートへのアクセス	8
2. サーバーの概要	9
関連情報	9
設置タスクの概要	9
関連情報	10
サーバーの概要	10
関連情報	11
フロントパネルのコンポーネント	11
関連情報	11
背面パネルのコンポーネント	11
関連情報	12
3. 仕様の確認	13
関連情報	13
物理仕様	13
関連情報	13
電気仕様	14
関連情報	14
環境要件	14
関連情報	15
通気に関する注意事項	15
関連情報	16
4. 設置の準備	17
関連情報	17
出荷用キット	17
関連情報	18
取り扱い上の注意	18
関連情報	19
ESD 防止対策	19
関連情報	19
設置に必要な工具	19
関連情報	20
サーバーを準備する	20
関連情報	20
5. サーバーの設置	21
関連情報	21
ラックの互換性	21

関連情報	22
ラックに関する注意事項	22
関連情報	24
ラックを固定する	24
関連情報	24
ラックマウントキット	24
関連情報	25
正しいラックマウント部品を選ぶ	25
関連情報	26
ラックの取り付け位置を決める	26
関連情報	27
ラックマウント部品を取り付ける	27
関連情報	30
サーバーを設置する	31
関連情報	32
CMA の取り付け	32
関連情報	32
CMA キット	33
正しい CMA 部品を選ぶ	33
CMA を取り付ける	34
6. サーバーケーブルの接続	37
関連情報	37
配線の要件	37
関連情報	38
ポートの識別	38
関連情報	39
USB ポート	39
SER MGT ポート	39
NET MGT ポート	40
ギガビット Ethernet ポート	41
VGA ポート	41
データケーブルおよび管理ケーブルの接続	42
関連情報	42
SER MGT ケーブルを接続する	43
NET MGT ケーブルを接続する	43
Ethernet ネットワークケーブルを接続する	44
その他のデータケーブルを接続する	44
CMA を使用してケーブルを固定する	45
関連情報	45
7. サーバーへのはじめての電源投入	47
関連情報	47
電源コードを準備する	47
関連情報	48
SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する	48

関連情報	49
はじめてシステムの電源を入れる	49
関連情報	50
Oracle ILOM システムコンソール	51
関連情報	51
OS のインストール	51
関連情報	51
プリインストールされている OS を構成する	52
新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)	52
新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)	54
Oracle Solaris OS の構成パラメータ	56
関連情報	56
静的 IP アドレスの SP への割り当て	57
関連情報	57
SP にログインする (SER MGT ポート)	57
静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる	58
関連情報	60
用語集	61
索引	65

1

・・・第 1 章

このドキュメントの使用方法

このドキュメントでは、Oracle SPARC T5-4 サーバーの設置の手順、背景情報、および参照物について説明します。このドキュメントは、同様の製品の設置について高度な経験とトレーニングを積んだ技術者、システム管理者、および承認サービスプロバイダを対象としています。これらの手順は、システム管理者が Oracle Solaris オペレーティングシステムを使用した経験があることを前提としています。

- [7 ページの「プロダクトノート」](#)
- [7 ページの「関連ドキュメント」](#)
- [7 ページの「フィードバック」](#)
- [8 ページの「Oracle サポートへのアクセス」](#)

プロダクトノート

この製品に関する最新の情報と既知の問題については、次にあるプロダクトノートを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/T5-4/docs>

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://docs.oracle.com
SPARC T5-4 サーバー	http://www.oracle.com/goto/T5-4/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM)	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Solaris 11 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs
Oracle Solaris 10 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs
Oracle VM Server for SPARC	http://www.oracle.com/goto/VM-SPARC/docs
Oracle VTS	http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html#sys_sw

フィードバック

このドキュメントについてのフィードバックは次からお寄せください。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通して電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

・・・第2章

サーバーの概要

これらのトピックでは、設置タスクのリストを示し、サーバーの概要を提供し、重要なコンポーネントについて説明します。

- [9 ページの「設置タスクの概要」](#)
- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)

関連情報

- [31 ページの「サーバーを設置する」](#)
- [第6章](#)
- [第7章](#)

設置タスクの概要

これらはサーバーを設置して構成するために実行するタスクです。

手順	説明	リンク
1	サーバーの最新情報については、『SPARC T5-4 サーバードキュメント』を参照してください。	『SPARC T5-4 サーバードキュメント』
2	サーバーの機能、仕様、および設置場所の要件を確認します。	10 ページの「サーバーの概要」 第3章
3	注文したすべてのアイテムを受け取ったことを確認します。	17 ページの「出荷用キット」
4	設置に必要なサーバーの機能、コントロール、LED について学びます。	11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」 11 ページの「背面パネルのコンポーネント」
5	安全対策と ESD 対策を取り、必要な工具を組み立てます。	18 ページの「取り扱い上の注意」 19 ページの「ESD 防止対策」 19 ページの「設置に必要な工具」
6	サーバーをラックに設置します。	第5章

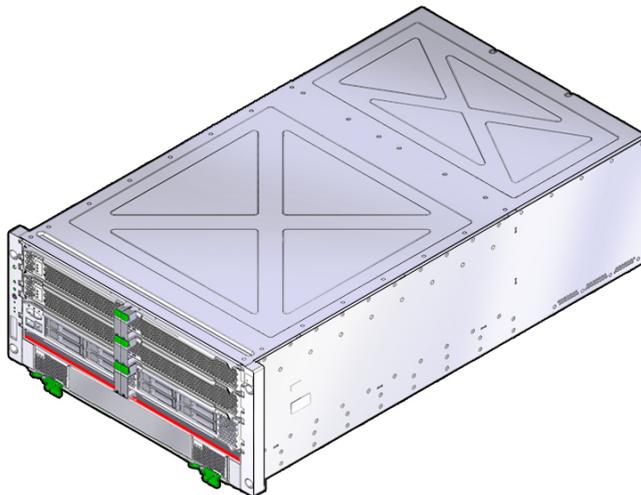
手順	説明	リンク
7	データケーブルと管理ケーブルをサーバーに接続します。	第6章
8	電源コードをサーバーに接続し、Oracle ILOM SP を構成し、サーバーにはじめて電源を入れ、オペレーティングシステムを設定します。	第7章

関連情報

- ・『サーバープロダクトノート』
- ・サーバーの安全性とコンプライアンス
- ・『サーバー管理』
- ・『サーバーサービス』

サーバーの概要

このトピックでは、サーバーの主要なコンポーネントおよび機能の概要を説明します。



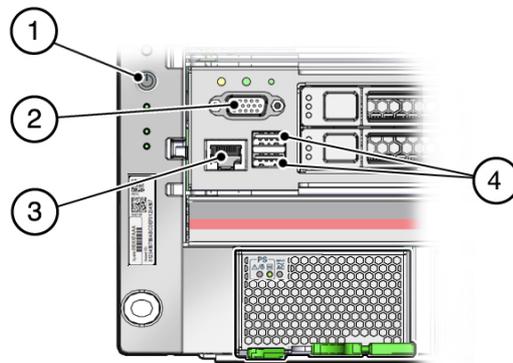
コンポーネント	説明
シャーシ	5RU フォームファクタのラックマウント可能なサーバー。
CPU	2 台または 4 台の SPARC T5、16 コアのチップマルチプロセッサ (CMP) (コアあたり 8 スレッド)。
メモリー	64 DDR3 DIMM スロット (容量: 16G バイトまたは 32G バイト)
I/O 拡張	PCIe Gen3 カードスロット 16 個 (x8 電気インタフェース)。
ストレージデバイス	内蔵ストレージの場合、サーバーは次を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 2.5 インチハードドライブ 8 基 (フロントパネル)。 ・ スロットローディング式 USB 接続 DVD+/-RW ドライブ (フロントパネル)。
ポート	外部 USB 3.0 ポート 4 基 (前面 2 基、背面 2 基)。
ビデオポート	DB-15 高密度ビデオポート 2 基 (前面 1 基、背面 1 基)。
Ethernet ポート	<ul style="list-style-type: none"> ・ RJ-45 SER MGT ポート 2 基 (前面 1 基、背面 1 基) ・ 10/100 NET MGT ポート 1 基 (背面)

コンポーネント	説明
	<ul style="list-style-type: none"> 10GbE 4 基、100/1000/10000 M ビット/秒 (背面)
電源装置	ホットスワップ対応 AC 3000W 冗長 2 台 (1 + 1)。フロントパネルでアクセス。
ファンモジュール	シャーシ背面にホットスワップ対応冗長ファンモジュール 5 基 (N+1)。
SP	Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM)。

関連情報

- 『サーバーサービス』
- Oracle ILOM のドキュメント
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)

フロントパネルのコンポーネント



番号	説明
1	電源ボタン
2	VGA ポート
3	USB 3.0 ポート
4	SER MGT ポート

関連情報

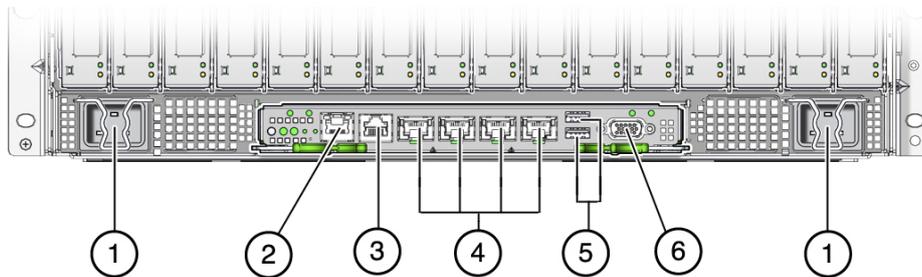
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)

背面パネルのコンポーネント



注記

サーバーへのケーブルの接続は、適切な順序で実施する必要があります。電源コードは、データケーブルをすべて接続するまでは接続しないでください。



番号	説明	リンク
1	電源ユニット AC 入力	
2	NET MGT RJ-45 ネットワークポート	40 ページの「NET MGT ポート」
3	SER MGT RJ-45 シリアルポート	39 ページの「SER MGT ポート」
4	ネットワークの 10GbE ポート: NET0-NET3	41 ページの「ギガビット Ethernet ポート」
5	USB 3.0 ポート	39 ページの「USB ポート」
6	VGA ポート	41 ページの「VGA ポート」

関連情報

- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [34 ページの「CMA を取り付ける」](#)
- [45 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

仕様の確認

これらのトピックでは、サーバーの設置に必要な技術情報および通気に関する注意事項について説明します。

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [14 ページの「電気仕様」](#)
- [14 ページの「環境要件」](#)
- [15 ページの「通気に関する注意事項」](#)

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [17 ページの「出荷用キット」](#)
- [38 ページの「ポートの識別」](#)

物理仕様

説明	アメリカ	メートル法
ラックユニット	5U	5U
高さ	8.5 in.	215 mm
幅	17.5 in.	445 mm
奥行き	31.5 in.	800 mm
重量 (ラックマウントキットを除く)	166 lb	75.4 kg
保守用最小クリアランス (前面)	36 in.	914.4 mm
保守用最小クリアランス (背面)	36 in.	914.4 mm
通気用最小クリアランス (前面)	2 in.	50.8 mm
通気用最小クリアランス (背面)	3 in.	76.2 mm

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [18 ページの「取り扱い上の注意」](#)
- [第5章](#)

- 14 ページの「電気仕様」
- 14 ページの「環境要件」
- 15 ページの「通気に関する注意事項」

電気仕様

説明	値	注記
電圧	200 - 240 VAC	
周波数	50 - 60 Hz	
200 VAC 時の最大動作入力電流	16 A (コードごとに 16 A)	
(実際の消費電流量は定格を 10% 程度まで超える場合があります) ¹		
200 VAC 時の最大動作入力電力	3000 W	
(実際の消費電力は定格を 10% 程度まで超える場合があります)		
最大待機電力	140 W	
アイドル入力電力 (最大構成) ²	1520 W	
アイドル入力電力 (最小構成) ³	1180 W	
ピーク AC 入力電力 (最大構成) ²	3225 W	SpecJBB に準拠
ピーク AC 入力電力 (最小構成) ³	2760 W	SpecJBB に準拠
最大放熱量	10,717 BTU/時 11,306 KJ/時	

¹最大動作入力電流の値は、 $P \div (V \times 0.95)$ に基づいたものです (P = 最大動作入力電力、V = 入力電圧)。例: $1060W / (220V * 0.95) = 5.1A$ この式を使用して、入力電圧に対する最大動作電流を計算します。

²公称温度および電圧条件下での最大サーバー構成仕様 (3.6 GHz T5 プロセッサ x 4, 32 GB DDR3 DIMM x 64, HDD x 8, および I/O カード x 16)。

³公称温度および電圧条件下での最小サーバー構成仕様 (3.6 GHz T5 プロセッサ x 4, 32 GB DDR3 DIMM x 64, HDD なし, および I/O カードなし)。



注意

サーバー付属の電源コードのみを使用してください。

電力仕様については、次の場所にある電力計算機能を使用してください。

<http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/sun-power-calculators>

関連情報

- 第7章
- 13 ページの「物理仕様」
- 14 ページの「環境要件」
- 15 ページの「通気に関する注意事項」

環境要件

このトピックでは、次の仕様について説明します。

- 温度、湿度、および高度

- ・ 衝撃および振動
- ・ 音響

表3.1 温度、湿度、および高度の仕様

説明	動作時		非動作時		注記
	アメリカ	メートル法	アメリカ	メートル法	
温度 (最高)	41 - 95°F (0 - 5 - 35°C 3000 ft)	(900 m で)	-40 - 149°F (0 - 3000 ft で)	-40 - 65°C (900 m で)	最高温度の低下: 3000 ft (900 m) を超えると、1.8°F/1000 ft (1°C/300 m)
相対湿度	10 - 90% (81°F で)	10 - 90% (27°C で)	最大 93% (100°F で)	最大 93% (38°C で)	最高湿球温度、結露なし
高度	95°F で 0 - 9840 ft ¹	0 - 3000 m (40°C で ¹)	最高 40,000 ft	最高 12,000 m	

¹中国市場 (規制により設置時の高度が 2 km 以下に制限されることがある) を除く。

表3.2 衝撃および振動の仕様

説明	動作時	注記
衝撃	3 G, 11 ms	半正弦
振動 (垂直)	0.15 G	5 - 500 Hz (Swept-Sine 法)
振動 (水平)	0.10 G	

表3.3 音響仕様

説明	アイドル状態での動作時	ピーク電力での動作時
音響出力 (LwAd 1B= 10 dB)	7.8 B	9.4 B
音圧レベル (LpAm: バイスタンダ 位置)	61.8 dBA	79.7 dBA

関連情報

- ・ サーバーの安全性とコンプライアンス
- ・ [13 ページの「物理仕様」](#)
- ・ [14 ページの「電気仕様」](#)
- ・ [14 ページの「環境要件」](#)
- ・ [15 ページの「通気に関する注意事項」](#)

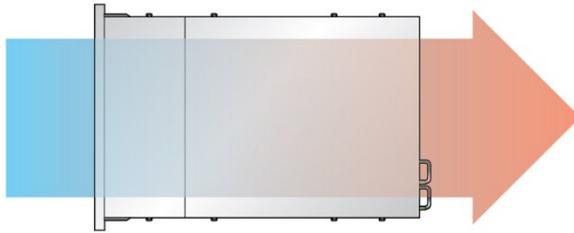
通気に関する注意事項



注意

適切な通気は、サーバー内部の温度を安全な動作の範囲内に保つために不可欠です。

通気はサーバーの前面から背面に流れます。



サーバー内の自由な通気を確保するために、これらのガイドラインに従ってください。

- 通気の最小クリアランスの仕様に従います。[13 ページの「物理仕様」](#)を参照してください。
- サーバーは前面が涼しい通路、背面が暖かい通路に面するように設置してください。
- 暖かい空気をサーバー内に引き込まないでください。
- ラックまたはキャビネット内で空気が再循環しないようしてください。
- サーバーの内部コンポーネントの保守を行う場合は、通気ダクトおよびバッフルが正しく取り付けられていることを確認してください。
- ケーブルは通気の邪魔にならないようにルーティングしてください。

関連情報

- [22 ページの「ラックに関する注意事項」](#)
- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [14 ページの「電気仕様」](#)
- [14 ページの「環境要件」](#)

4

・・・第4章

設置の準備

これらのトピックでは、サーバーの設置に先立って従うべき注意事項、組み立てに必要な工具、および実行するタスクについて詳しく説明します。

手順	説明	リンク
1	注文したすべてのアイテムがそろっていることを確認します。	17 ページの「出荷用キット」
2	ESD および安全性に関する注意事項を確認します。	18 ページの「取り扱い上の注意」 19 ページの「ESD 防止対策」
3	適切な工具があることを確認します。	19 ページの「設置に必要な工具」
4	設置のためにサーバーを準備します。	20 ページの「サーバーを準備する」

関連情報

- [第5章](#)
- [第6章](#)
- [第7章](#)

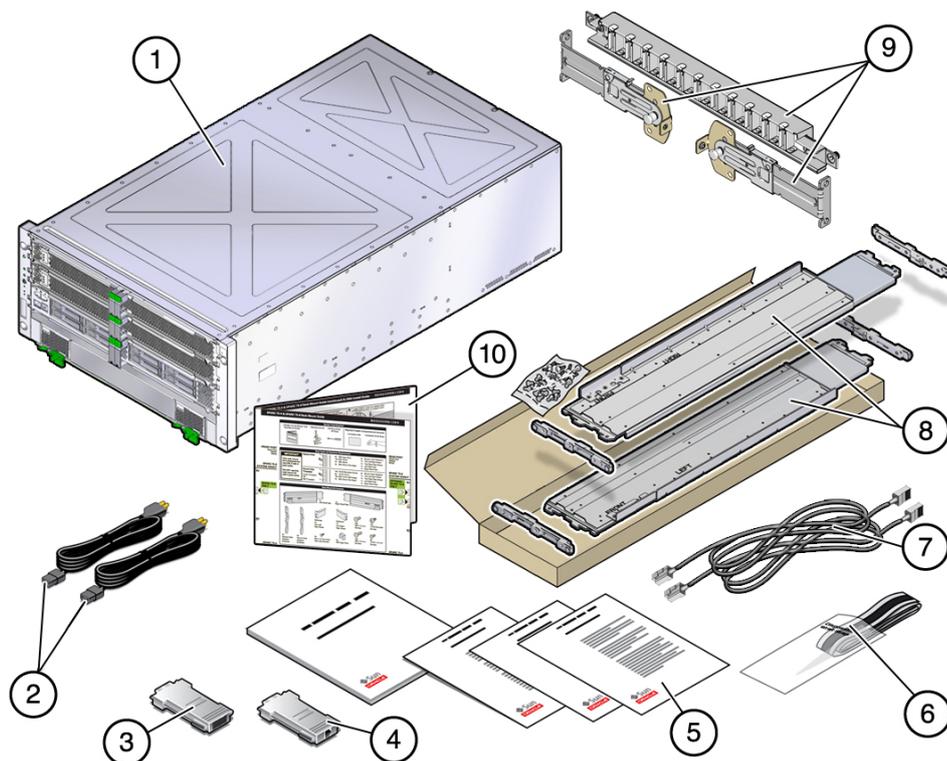
出荷用キット



注記

サーバーが到着したら、設置する環境にサーバーを置いてください。設置場所で、梱包を解かずにサーバーを 24 時間放置してください。この休止期間によって、温度衝撃および結露を防ぐことができます。

サーバーと一緒に出荷されるコンポーネントがすべて届いていることを確認します。



番号	説明
1	サーバー
2	AC 電源コード (数量 2)
3	RJ-45/DB-25 クロスアダプタ
4	RJ-45/DB-9 クロスアダプタ
5	印刷物のドキュメント一式
6	静電気防止用リストストラップ
7	Ethernet ケーブル (数量 2)
8	ラックマウントキット
9	ケーブル管理部品
10	ラックバディーツェンプレート

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [24 ページの「ラックマウントキット」](#)

取り扱い上の注意



注意

取り付け作業を開始する前に、装置ラックの転倒防止バーを配置してください。

**注意**

装置は常にラックの底部から上へと取り付け、ラックの上が重くなって転倒しないようにします。

**注意**

リフトを使わずに 1 人でサーバーを動かそうとしないでください。1 人で設置する場合は、主要なコンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、主要なコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトはオプションです。

**注意**

ラックに装置を取り付ける各手順の開始前、作業中、および作業後に何をやろうとしているかを明確に伝えて、混乱を最小限にしてください。

関連情報

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [19 ページの「ESD 防止対策」](#)
- [第5章](#)
- [サーバーのスタートガイド](#)

ESD 防止対策

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷を防止してください。

**注意**

静電気により損傷を受けると、サーバーを永久に使用できなくなったり、サービス技術者による修理が必要になる場合があります。静電気から電子コンポーネントを保護するには、部品を静電気防止マット、静電気防止バッグまたは使い捨ての静電気防止マットなどの帯電防止面に置きます。サーバーコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電気防止用アースストラップを着用してください。

関連情報

- [18 ページの「取り扱い上の注意」](#)

設置に必要な工具

- 長いプラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- カッターまたは頑丈なはさみ

- ・ サインペンまたはテープ
- ・ ESD マットおよびアースストラップ
- ・ 油圧式または機械式リフト (2 人で設置する場合はオプション)

さらに、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスを用意する必要があります。

- ・ ASCII 端末
- ・ ワークステーション
- ・ 端末サーバー (初期ブート出力取得用のオプション)
- ・ 端末サーバーに接続されたパッチパネル

関連情報

- ・ [18 ページの「取り扱い上の注意」](#)
- ・ [19 ページの「ESD 防止対策」](#)
- ・ 『サーバーサービス』

サーバーを準備する



注意

リフトを使わずに 1 人でサーバーを動かそうとしないでください。1 人で設置する場合は、コンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、主要なコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトはオプションです。

1. サーバーを箱から取り出します。
[17 ページの「出荷用キット」](#)を参照してください。
2. サーバーからプロセッサモジュール、メインモジュール、電源装置、およびファンモジュールをすべて取り外します。
詳細な手順は、サービスマニュアルを参照してください。
3. 次の手順を決定します。
 - ・ 1 人で設置する場合は、機械式リフトの上にサーバーを置きます。
 - ・ 2 人で設置する場合は、機械式リフトが利用できればその上にサーバーを置きます。
4. 取り付ける必要のある PCIe カードがある場合は PCIe カードキャリアを取り外します。
詳細な手順は、サービスマニュアルを参照してください。
5. ラックにサーバーを取り付けます。
[31 ページの「サーバーを設置する」](#)を参照してください。

関連情報

- ・ [13 ページの「物理仕様」](#)
- ・ [18 ページの「取り扱い上の注意」](#)
- ・ [19 ページの「ESD 防止対策」](#)
- ・ 『サーバーサービス』

サーバーの設置

これらのトピックでは、角型取り付け穴が付いたキャビネットにサーバーを設置する方法を説明します。丸型取り付け穴が付いたキャビネットにサーバーを設置する場合は、[25 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)を参照してください。



注記

ラックマウントキットに説明書が付属している場合は、この章の手順ではなくその手順を使用してください。サーバーの取り付けを行なったら、[第7章](#)に進んで初回の電源投入を行なってください。

手順	説明	リンク
1	ラックがサーバーの要件を満たしていることを確認します。	21 ページの「ラックの互換性」
2	正しいラックマウント部品を選び、その部品を取り付けます。	25 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」 26 ページの「ラックの取り付け位置を決める」 27 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」
3	ラックにサーバーを取り付けます。	31 ページの「サーバーを設置する」
4	(オプション) CMA を取り付けます。	32 ページの「CMA の取り付け」
5	配線の要件とポートの情報を確認します。データケーブルと管理ケーブルをサーバーに接続します。	第6章
6	Oracle ILOM SP を構成し、サーバーに対して初回の電源投入を行います。	第7章

関連情報

- ・ [第2章](#)
- ・ [第6章](#)

ラックの互換性

ラックマウントキットは、次の基準を満たす装置ラックと互換性があります。

項目	要件
CMA と使用する場合のラックの種類	1200 mm ラック

項目	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。2 ポストラックは互換性がありません。
ラックの横方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。
ラックレール取り付け穴のサイズ	9.5 mm の四角穴および M6 丸型取り付け穴のみがサポートされています。7.2 mm、M5、10 - 32 の取り付け穴など、その他のすべてのサイズはサポートされていません。
前方と後方取り付け面の間の距離	最小: 24 in. (240 mm) 最大: 36 in. (915 mm)
前方取り付け面の手前のクリアランスの奥行き	キャビネット前面ドアまでの距離が最低 1 in. (25.4 mm) あること。
前方取り付け面の背後のクリアランスの奥行き	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで最低 34.6 in. (878.8 mm) の間隔があること、ケーブル管理アームを使用しない場合は最低 31.5 in. (800 mm) あること。
前方と後方取り付け面の間のクリアランスの幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が最低 18.9 in. (480 mm) あること。
サーバーの寸法	奥行: 31.5 in. (800 mm) 幅: 17.5 in. (445 mm) 高さ: 8.5 in. (215 mm)

関連情報

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [19 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [24 ページの「ラックマウントキット」](#)
- [25 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)

ラックに関する注意事項



注意

装置の搭載: 装置は常にラックの底部から上へと取り付け、ラックの上が重くなって転倒しないようにします。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを配置します。



注意

動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって装置は、サーバーに指定された最大周辺温度 (TMA) に適合する環境内でのみ設置してください。



注意

通気の低下: 装置をラックに取り付けて、装置が安全に動作するための十分な通気を得られるようにします。



注意

装置の配置: 重量が均等に分散されるように装置をラックに搭載します。装置の配置が不均等な場合、危険な状態になっている可能性があります。



注意

回路の過負荷: 電源装置の回路に過大な電流が流れないようにします。サーバーを電源回路に接続する前に、装置のラベルに示されている定格電力を確認し、回路の過負荷によって過電流保護や装置の配線にどのような影響があるかを検討します。



注意

安全な接地: ラックに搭載する装置は必ず安全に接地します。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (電源タップの使用など) の場合は、特に注意してください。



注意

スライドレールに搭載した装置を、シェルフやワークスペースとして使用しないでください。



注意

リフトを使わずに 1 人でサーバーを動かそうとしないでください。1 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトはオプションです。



注意

サーバーは、重量があるため、ラックに入った状態で輸送しないでください。サーバーは最終的な場所でのみラックに取り付けてください。



注意

サーバーを設置したらラックを動かそうとしないでください。

関連情報

- [13 ページの「物理仕様」](#)
- [18 ページの「取り扱い上の注意」](#)
- [24 ページの「ラックを固定する」](#)

ラックを固定する



注意

作業員が負傷する危険性を低減するために、サーバーを取り付ける前にすべての転倒防止装置を伸ばしてラックを固定します。

次のステップの詳細な手順については、ラックのドキュメントを参照してください。

1. ラックに関する注意事項を読み、ラックを固定します。
[22 ページの「ラックに関する注意事項」](#)を参照してください。
2. ラックの前面ドアと背面ドアを開いて取り外します。
3. 取り付け中にラックキャビネットが転倒しないように、用意されているすべての転倒防止機能を使用してキャビネットを固定します。
4. 横転を防ぐための平行調整脚がラックの下部にある場合は、調整脚を床まで完全に伸ばします。

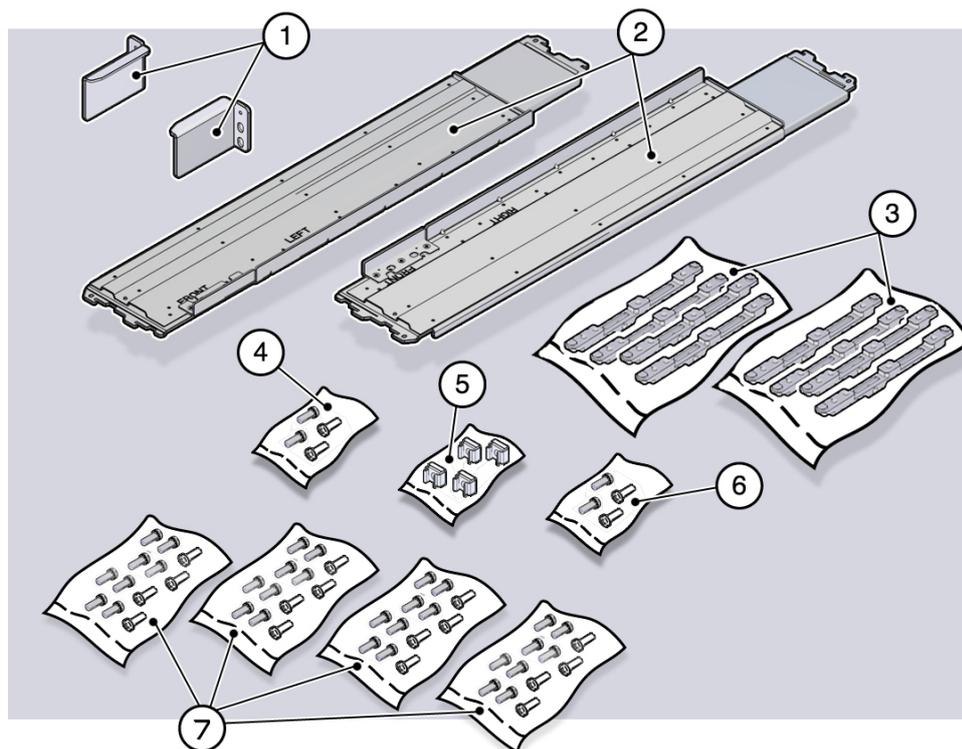
関連情報

- ラックのドキュメント
- サーバーの安全性とコンプライアンス
- [21 ページの「ラックの互換性」](#)
- [22 ページの「ラックに関する注意事項」](#)

ラックマウントキット

ラックマウントキットにはシェルフレールが 2 つ含まれていて、これらをラックの両側に 1 つずつ取り付けます。各シェルフレールには、「LEFT」または「RIGHT」と書かれています。

シェルフレールは、4 つの補助留め具でラックまたはキャビネットに取り付けます。シェルフレールは、奥行き 25 - 34.25 in. (63.5 - 87 cm) のラックに対応します。



番号	説明
1	上部背面留め具
2	シェルフレール
3	補助留め具 (角型取り付け穴が付いたキャビネットと、丸型取り付け穴が付いたキャビネット用に、2種類が用意されている)
4	平頭ねじ
5	ねじ式インサート
6	M6 ねじ
7	ラックマウントねじ

関連情報

- [19 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [27 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」](#)
- [21 ページの「ラックの互換性」](#)
- [25 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)

正しいラックマウント部品を選ぶ

- ラックの取り付けに必要な部品を判断します。

キャビネットの種類	必要なねじセット
角穴	SCREW、SEMS、M6 X 16 CAGENUTS、M6 SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10

キャビネットの種類	必要なねじセット
丸穴 (10-32) (コーナーベゼル付き)	SCREW、SEMS、10-32 X 10 SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10
丸穴 (M6) (コーナーベゼル付き)	SCREW、SEMS、M6 X 12 SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10
丸穴 (10-32) (屋内設置)	SCREW、SHOULDER、10-32 SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10
丸穴 (M6) (屋内設置)	SCREW、SEMS、M6 X 12 SCREW、FLAT HEAD、M4 X 10



注記

キットに含まれているねじセットのいくつかは、このサーバーの設置には必要ありません。

関連情報

- [21 ページの「ラックの互換性」](#)
- [26 ページの「ラックの取り付け位置を決める」](#)
- [27 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」](#)

ラックの取り付け位置を決める

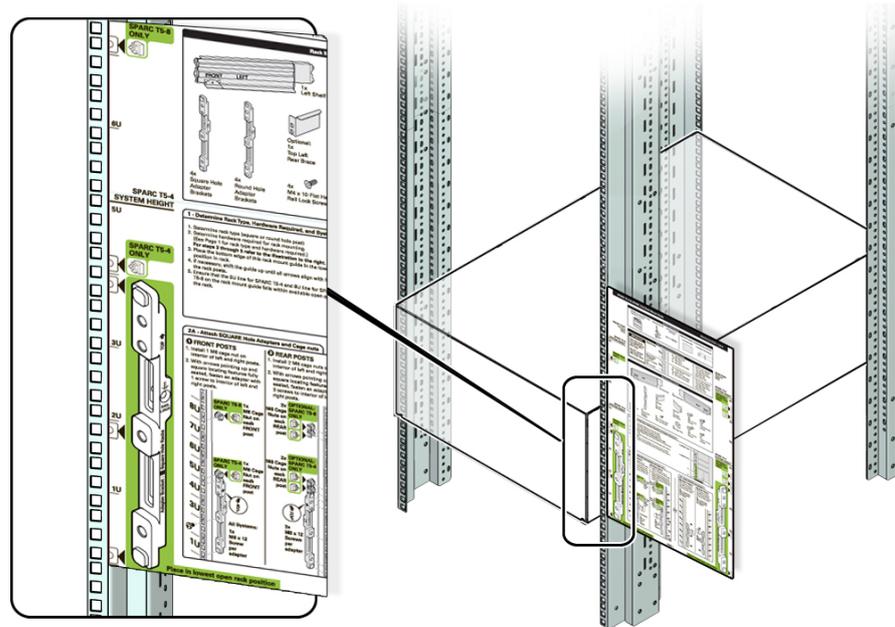
ラックマウントテンプレートを使用して、シェルフレールを取り付けるための正しい取り付け穴を特定します。



注記

ラックには下から上に搭載してください。

1. キャビネットに、サーバーを取り付けるために十分な高さがあることを確認します。
2. ラックマウントテンプレートを前面のレールに合わせます。
テンプレート下端がサーバーの下端に当たります。テンプレート下端から上に高さを測ります。



3. 前面のシェルフレールを取り付ける取り付け穴にマークを付けます。
4. 背面のシェルフレールを取り付ける取り付け穴にマークを付けます。

関連情報

- [21 ページの「ラックの互換性」](#)
- [25 ページの「正しいラックマウント部品を選ぶ」](#)
- [27 ページの「ラックマウント部品を取り付ける」](#)

ラックマウント部品を取り付ける

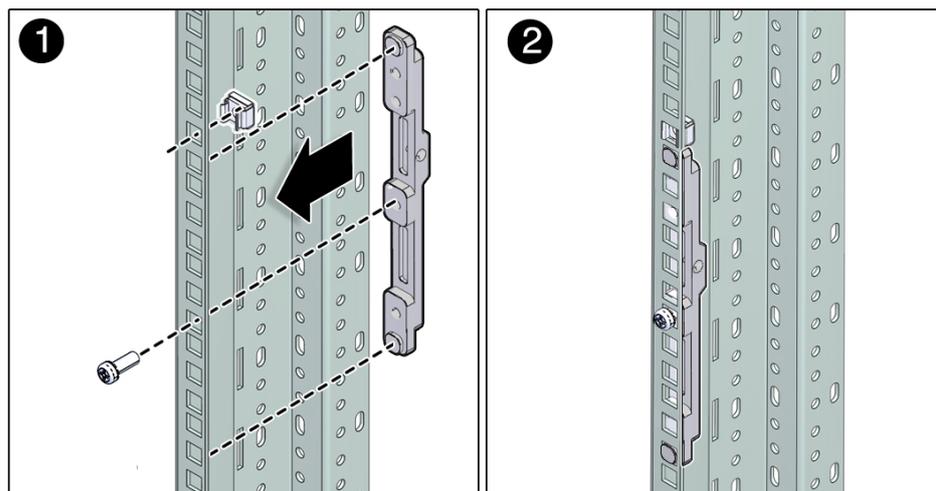
1. 左右それぞれの前面取り付け位置に対して、次の手順を実行します。
 - a. 補助留め具をマークした場所に配置します。



注記

「上」矢印は正しい方向を示しています。

- b. 2 番のプラスのねじを 1 本使用して、中央の穴に補助留め具を固定します。
- c. 補助留め具のすぐ上の穴に取り付けクリップを差し込みます。



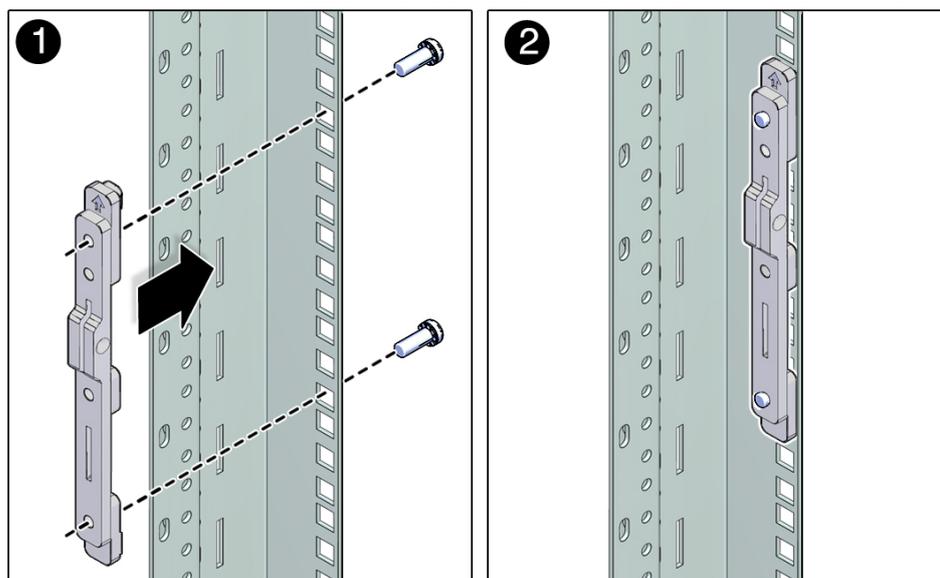
2. 左右それぞれの背面取り付け位置に対して、次の手順を実行します。
 - a. 補助留め具をマークした場所に配置します。



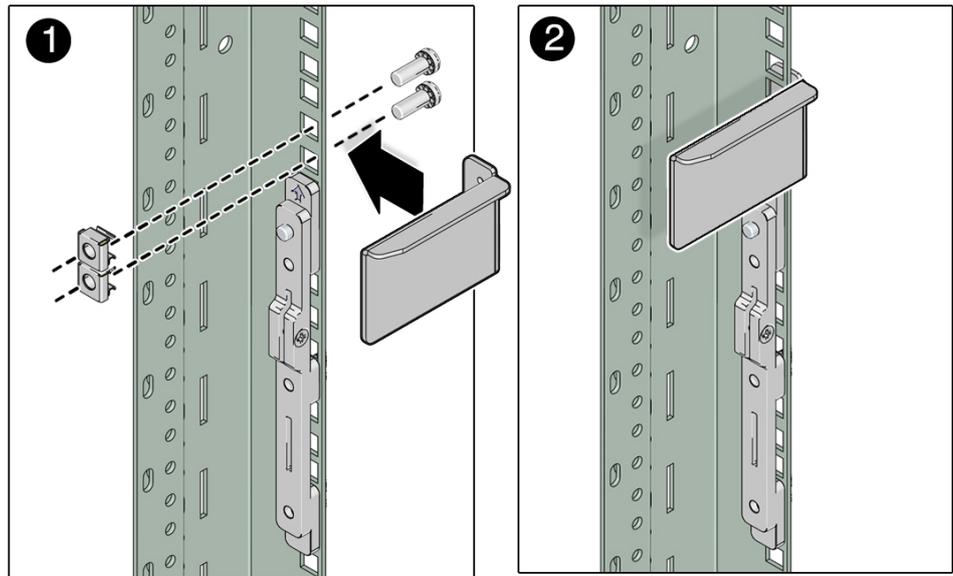
注記

「上」矢印は正しい方向を示しています。

- b. 2 番のプラスのねじを 2 本使用して、補助留め具の上部と下部の穴を固定します。



3. 左右の上部コーナー留め具を取り付けます。
 - a. 2 つのケージナットを、キャビネットの補助留め具の上の 2 つの穴に差し込みます。



- b. 2 番のプラスのねじ 2 本で、上部のコーナー留め具をそれぞれ固定します。
4. シェルフレールを取り付けます。



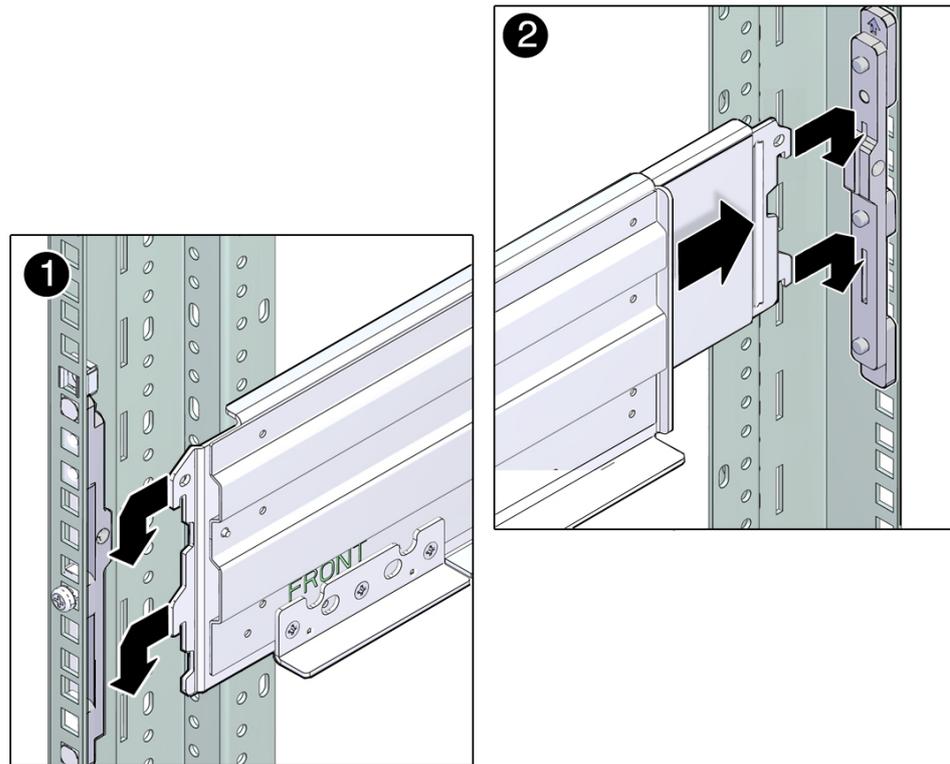
注記

シェルフレールには、サーバー前面から見た場合の位置で「Left」または「Right」、「Front」または「Rear」と書かれています。

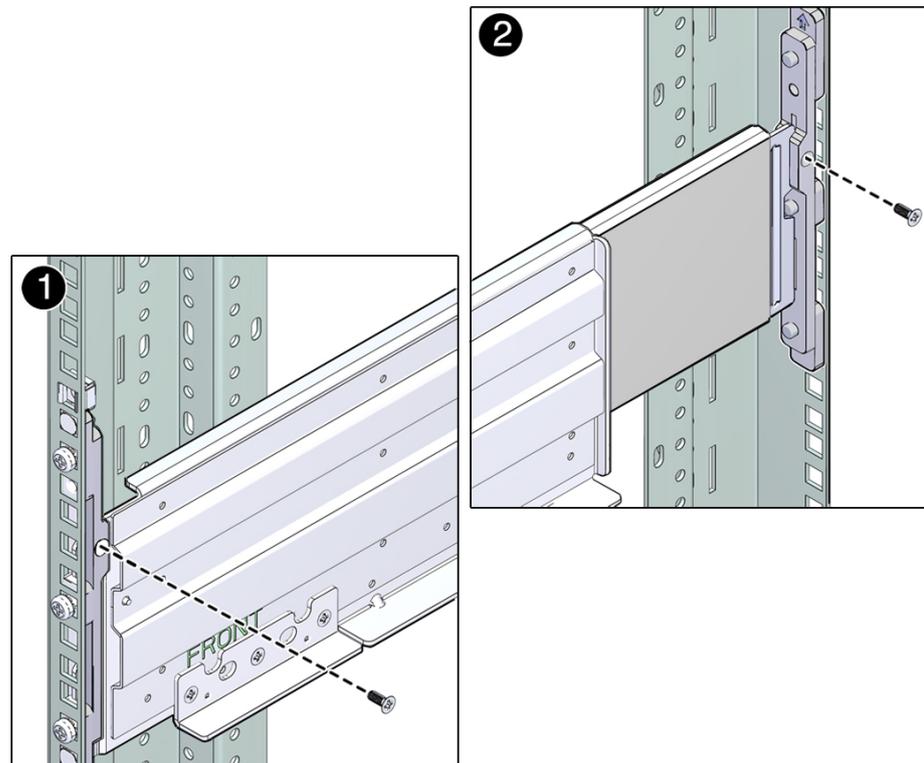
左右のシェルフレールに対して次を繰り返します。

- a. シェルフレールの前面を前面補助留め具に差し込みます。
- b. シェルフレールの背面を背面補助留め具に差し込みます。

シェルフレールは、キャビネットの奥行きに合わせてスライドさせることができます。



c. 各シェルフレールを 2 番のプラス平頭ねじ 2 本で固定します。



関連情報

- [21 ページの「ラックの互換性」](#)
- [22 ページの「ラックに関する注意事項」](#)

- ・ 24 ページの「ラックマウントキット」

サーバーを設置する



注意

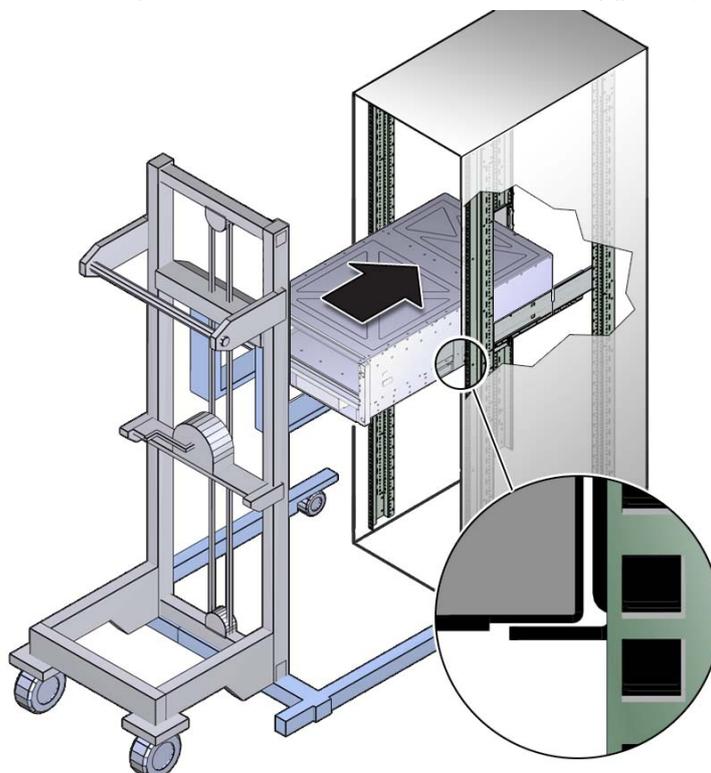
リフトを使わずに 1 人でサーバーを動かそうとしないでください。1 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外し、リフトを使用する必要があります。2 人で設置する場合は、すべてのコンポーネントを取り外す必要がありますが、リフトはオプションです。



注意

サーバーを設置したらラックを動かそうとしないでください

1. サーバーを設置する前に、プロセッサモジュール、メインモジュール、電源装置、およびファンモジュールをすべて取り外していることを確認します。
これらのコンポーネントを取り外す手順については、サービスマニュアルを参照してください。
2. 機械式リフトを使用する場合は、リフトが水平に固定されていることを確認します。
3. サーバーを正しい高さまで持ち上げます。
4. サーバーをラック内にスライドさせます。
サーバーの下端がラックレールの底よりも上にあることを確認します。



5. 2 番のプラスのねじを 4 本使用して、サーバーをフロントパネルに固定します。
6. 取り外したすべてのコンポーネントを戻します。

これらのコンポーネントを取り付ける手順については、サービスマニュアルを参照してください。

関連情報

- [21 ページの「ラックの互換性」](#)
- [22 ページの「ラックに関する注意事項」](#)
- [24 ページの「ラックを固定する」](#)
- [24 ページの「ラックマウントキット」](#)

CMA の取り付け

ケーブル管理部品は、サーバー背面に接続された電源ケーブルとデータケーブルを管理およびルーティングするためのオプションのキットです。



注記

CMA が取り付けられたこのサーバーは、1200 mm のラックにのみ適合します。

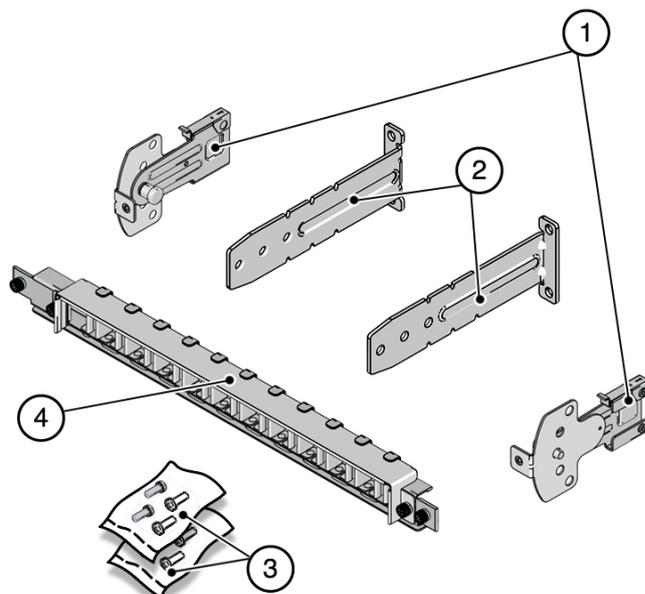
これらのトピックでは、CMA の取り付けに必要な情報とタスクを示します。

- [33 ページの「CMA キット」](#)
- [33 ページの「正しい CMA 部品を選ぶ」](#)
- [34 ページの「CMA を取り付ける」](#)
- [45 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

関連情報

- [24 ページの「ラックマウントキット」](#)
- [33 ページの「CMA キット」](#)
- [45 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

CMA キット



番号	説明
1	回転式留め具
2	L 字型留め具
3	ねじ
4	CMA

関連情報

- [33 ページの「正しい CMA 部品を選ぶ」](#)
- [34 ページの「CMA を取り付ける」](#)
- [45 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」](#)

正しい CMA 部品を選ぶ

- CMA の取り付けに必要な部品を判断します。

キャビネットの種類	必要なねじセット
角穴	SCREW、SEMS、M6 X 16
丸穴 (M6) (すべての種類)	
丸穴 (10-32) (すべての種類)	SCREW、SEMS、10-32 X 7/16"



注記

キットに含まれているねじセットのいくつかは、このサーバーの設置には必要ありません。

関連情報

- [33 ページの「CMA キット」](#)

- [34 ページの「CMA を取り付ける」](#)

CMA を取り付ける

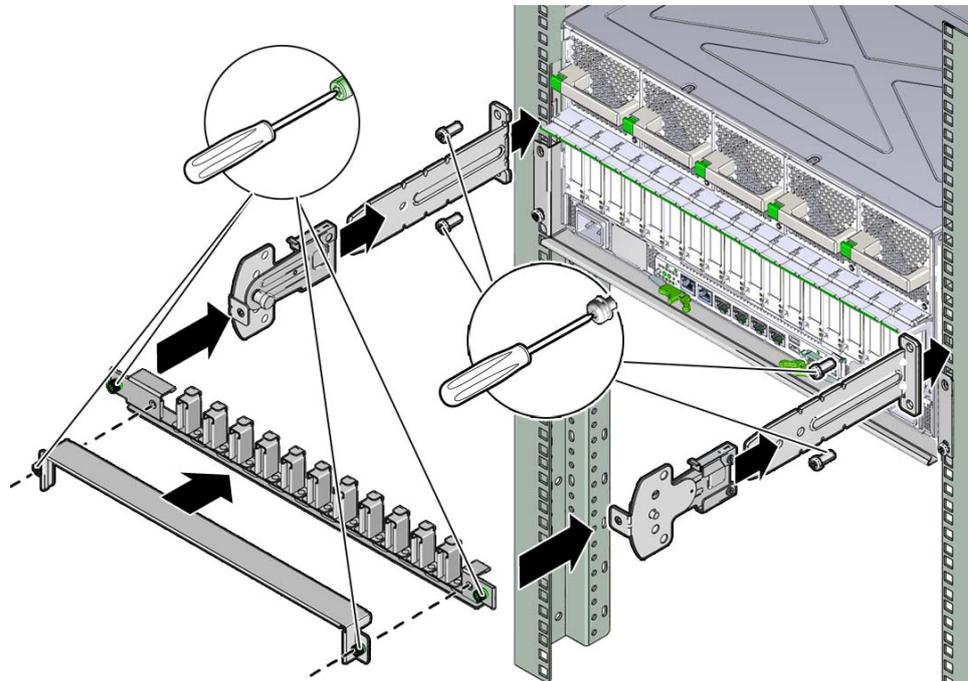
CMA はサーバーの背面中央に取り付けます。



注記

CMA の取り付けによって、キャビネットの電源差込口のいくつかがふさがれて使用できなくなる場合があります。

1. サーバーをラックに設置する前に取り外した可能性のあるすべてのコンポーネントを戻していることを確認します。
これらのコンポーネントを取り付ける手順については、サービスマニュアルを参照してください。
2. L 字型留め具を背面に取り付けます。
留め具には、サーバー背面から見た場合の位置で「Left」または「Right」と書かれています。左側と右側に対して次を繰り返します。
 - a. 左右どちらの留め具かを確認します。
 - b. ラックマウントアダプタから真ん中の 2 つのねじを外します。
 - c. 中央の 2 つの取り付け穴の上に留め具を配置します。
 - d. 2 番のプラスのねじ 2 本で、固定部品をそれぞれ固定します。



3. 左右の回転式留め具を左右の L 字型留め具に差し込みます。
4. 2 本の拘束ねじで CMA を固定します。

関連情報

- [33 ページの「CMA キット」](#)

- [33 ページの「正しい CMA 部品を選ぶ」](#)

サーバーケーブルの接続

これらのタスクでは、サーバーのブートを試みる前にネットワークおよびシリアルポートを接続して構成する方法について説明します。

手順	説明	リンク
1	ケーブルの要件を確認します。	37 ページの「配線の要件」
2	フロントパネルと背面パネルのコネクタおよびポートを確認します。	11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」 11 ページの「背面パネルのコンポーネント」
3	管理ケーブルおよびデータケーブルを接続します。	38 ページの「ポートの識別」 42 ページの「データケーブルおよび管理ケーブルの接続」
4	CMA にケーブルを固定します。	45 ページの「CMA を使用してケーブルを固定する」

関連情報

- ・ [第2章](#)
- ・ [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- ・ [第5章](#)
- ・ [第7章](#)

配線の要件

- ・ サーバーのケーブル接続の最小構成。
 - ・ サーバーのシステムボード上の 1 つ以上の Ethernet ネットワーク接続 (NET ポート)
 - ・ シリアル管理ポート (SER MGT ポート): SP ローカル接続 (OBP 出力あり)
 - ・ ネットワーク管理ポート (NET MGT ポート): SP リモート接続 (OBP 出力なし)
 - ・ サーバー電源装置の電源ケーブル
- ・ **SP 管理ポート:** ILOM SP で使用するための 2 つの SP 管理ポートがあります。
 - ・ SER MGT ポートは RJ-45 ケーブルを使用し、常に使用可能です。このポートは、ILOM SP へのデフォルトの接続です。
 - ・ NET MGT ポートは、ILOM SP へのオプションの接続です。NET MGT ポートは、DHCP をデフォルトで使用するよう構成されています。静的 IP アドレスを設定するには、[57](#)

ページの「静的 IP アドレスの SP への割り当て」を参照してください。SP ネットワーク管理ポートでは、10/100 BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。

- **Ethernet** ポートには、NET0、NET1、NET2、および NET3 のラベルが付いています。Ethernet インタフェースは、100M ビット/秒、1000M ビット/秒、および 10000M ビット/秒で動作します。

接続タイプ	IEEE 用語	転送速度
ファスト Ethernet	100BASE-T	100M ビット/秒
ギガビット Ethernet	1GBASE-T	1000M ビット/秒
10 ギガビット Ethernet	10GBASE-T	10000M ビット/秒



注記

10GBASE-T の速度には、最低でもカテゴリ 5E のケーブルが必要です。定格最大距離 100 m までの 10GBASE-T の速度には、最低でもカテゴリ 6A のケーブルが必要です。

- USB ポート: USB ポートは、ホットプラグをサポートします。サーバーの動作中でも、サーバーの動作に影響を与えることなく USB ケーブルや周辺デバイスを接続および切断できます。
 - OS の動作中にのみ、USB ホットプラグ処理を実行できます。サーバーの **ok** プロンプトの表示中、およびシステムのブートが完了するまでは、USB ホットプラグ処理はサポートされません。
 - 4 つの USB コントローラには、それぞれデバイスを 126 台まで接続でき、1 つのサーバーにつき合計 504 台の USB デバイスを接続できます。
- AC 電源ケーブル: データケーブルの接続が完了し、サーバーをシリアル端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) に接続するまでは、電源ケーブルを電源装置に接続しないでください。AC 電源ケーブルを電源に接続するとすぐに、サーバーがスタンバイモードになり、Oracle ILOM SP が初期化されます。サーバーが端末、PC、またはワークステーションに接続されていない場合、システムメッセージは表示されません。

関連情報

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [43 ページの「NET MGT ケーブルを接続する」](#)
- [44 ページの「Ethernet ネットワークケーブルを接続する」](#)
- [47 ページの「電源コードを準備する」](#)

ポートの識別

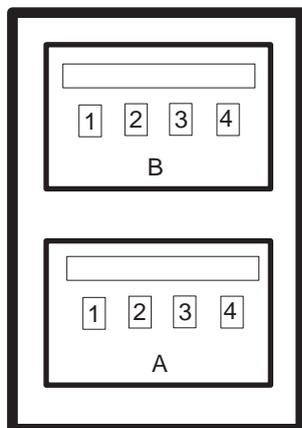
- [39 ページの「USB ポート」](#)
- [39 ページの「SER MGT ポート」](#)
- [40 ページの「NET MGT ポート」](#)
- [41 ページの「ギガビット Ethernet ポート」](#)
- [41 ページの「VGA ポート」](#)

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [42 ページの「データケーブルおよび管理ケーブルの接続」](#)

USB ポート

2 つの USB 3.0 ポートが背面パネルにあります。このほかに、メインモジュールにも USB 3.0 ポートが 2 つあり、フロントパネルからアクセスできます。USB ポートの位置は、[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)および [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)で確認してください。USB ポートは、ホットプラグをサポートします。サーバーの動作中でも、サーバーの動作に影響を与えることなく USB ケーブルや周辺デバイスを接続および切断できます。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
A1	+5 V (ヒューズ付き)	B1	+5 V (ヒューズ付き)
A2	USB0/1-	B2	USB2/3-
A3	USB0/1+	B3	USB2/3+
A4	アース	B4	アース

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [42 ページの「データケーブルおよび管理ケーブルの接続」](#)

SER MGT ポート

SER MGT RJ-45 ポートは背面パネルにあり、SP への TIA/EIA-232 シリアル Oracle/Cisco 標準接続を提供します。このポートは、Oracle ILOM システムコントローラへのデフォルトの接続です。DTE 間の通信では、標準の RJ-45 ケーブルとともに付属の RJ-45/DB-9 クロスアダプ

タを使用して、必要なマルチモデム構成を実現できます。[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。

この他に、メインモジュールにも SER MGT ポートが 1 つあり、フロントパネルからアクセスできます。[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)を参照してください。



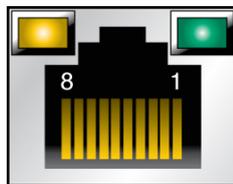
ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	送信要求	5	アース
2	データ端末レディー	6	受信データ
3	送信データ	7	データセットレディー
4	アース	8	送信可

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)

NET MGT ポート

NET MGT RJ-45 ポートは背面パネルにあり、SP へのオプションの Ethernet 接続を提供します。NET MGT ポートは、Oracle ILOM SP へのオプションの接続です。SP NET MGT ポートでは、10/100 BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。DHCP サーバーを使用しないネットワークでは、SER MGT ポートを通してネットワーク設定を構成するまで、このポートにアクセスできません。[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	送信データ +	5	コモンモードの終了
2	送信データ -	6	受信データ -
3	受信データ +	7	コモンモードの終了
4	コモンモードの終了	8	コモンモードの終了

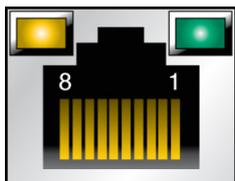
関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)

- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [43 ページの「NET MGT ケーブルを接続する」](#)
- [58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

ギガビット Ethernet ポート

4 つの RJ-45 10 ギガビット Ethernet ポート (NET0、NET1、NET2、NET3) がシステム背面パネルにあります。[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。Ethernet インタフェースは 100M ビット/秒、1000M ビット/秒、および 10000M ビット/秒で動作します。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	送信/受信データ 0 +	5	送信/受信データ 2 -
2	送信/受信データ 0 -	6	送信/受信データ 1 -
3	送信/受信データ 1 +	7	送信/受信データ 3 +
4	送信/受信データ 2 +	8	送信/受信データ 3 -

関連情報

- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [44 ページの「Ethernet ネットワークケーブルを接続する」](#)

VGA ポート

サーバーには 15 ピンの VGA ビデオポートが 2 つ搭載されています。1 つはサーバーの前面にあり、もう 1 つは背面にあります。[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)および [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。DB-15 ビデオケーブルを使用してビデオアダプタに接続し、必要な接続を実現します。サポートされる最大解像度は 1024 x 768 です。



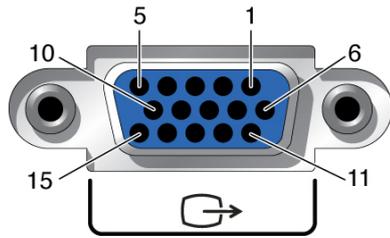
注記

一度に使用できるのは 2 つのポートのうち 1 つのみです。背面の VGA ポートはデフォルトで無効になっています。背面ポートを有効にして前面ポートを無効にするには、Oracle ILOM `VGA_REAR_PORT` ポリシーを有効にする必要があります。-> **set /SP/policy VGA_REAR_PORT=enabled.**



注記

モニターと VGA ポートの接続に使用するケーブルの長さは 6 m を超えないようにしてください。



ピン	信号の説明	ピン	信号の説明
1	赤ビデオ	9	[KEY]
2	緑ビデオ	10	同期アース
3	青ビデオ	11	モニター ID - ビット 1
4	モニター ID - ビット 2	12	VGA 12C シリアルデータ
5	アース	13	水平同期
6	赤アース	14	垂直同期
7	緑アース	15	VGA 12C シリアルクロック
8	青アース		

関連情報

- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [第6章](#)

データケーブルおよび管理ケーブルの接続

これらのケーブルを接続したら、AC 電源コードを接続する前に [第7章](#)を参照してください。



注意

サーバー付属の電源コードのみを使用してください。

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [43 ページの「NET MGT ケーブルを接続する」](#)
- [44 ページの「Ethernet ネットワークケーブルを接続する」](#)
- [44 ページの「その他のデータケーブルを接続する」](#)

関連情報

- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [38 ページの「ポートの識別」](#)

SER MGT ケーブルを接続する

SP のシリアル管理ポートには、SER MGT と書かれています。コネクタの位置については、[11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)および [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。

- RJ-45 ケーブル (カテゴリ 5) を、SP SER MGT ポートから端末デバイスに接続します。サーバーの初期管理にこのポートを使用してください。このポートは NET MGT ポートのアクティブ化に必要です ([第7章](#)を参照)。
DB-9 または DB-25 ケーブルを接続している場合、適切なクロスオーバーケーブル用のアダプタを使用して必要なヌルモデム構成を作成します。



注記

SP SER MGT ポートはサーバー管理にのみ使用します。これは、SP と端末またはコンピュータとのデフォルトの接続です。



注意

モデムを SP SER MGT ポートに接続しないでください。

関連情報

- [37 ページの「配線の要件」](#)
- [10 ページの「サーバーの概要」](#)
- [11 ページの「フロントパネルのコンポーネント」](#)
- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)

NET MGT ケーブルを接続する

SP ネットワーク管理ポートには、NET MGT というラベルが付いています。サーバーの初期構成を行なったあとで、この NET MGT ポートを使用して、Ethernet ネットワーク経由で SP に接続できます。

IP アドレスの指定に DHCP サーバーを使用しているネットワークの場合は、DHCP サーバーによってこの NET MGT ポートに IP アドレスが割り当てられます。この IP アドレスにより、SSH 接続を使用して SP に接続できます。DHCP を使用しないネットワークの場合は、SER MGT ポートを通してネットワーク設定を構成するまで、この NET MGT ポートにアクセスできません。手順については、[58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)を参照してください。

- カテゴリ 5 (またはそれ以上) のケーブルを使用して、NET MGT ポートをネットワークスイッチまたはハブに接続します。
コネクタの位置については、[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。

48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」で説明するように、SER MGT ポートを介してネットワーク設定を構成するまで、NET MGT ポートは動作しません。



注記

NET MGT ポートは、デフォルトでは DHCP を介してネットワーク設定を取得し、SSH を使用した接続を有効にするように構成されています。使用しているネットワークに合わせて、これらの設定の変更が必要になる場合があります。これらの設定の変更に関する情報は、[第7章](#)にあります。

関連情報

- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)
- [39 ページの「SER MGT ポート」](#)

Ethernet ネットワークケーブルを接続する

サーバーには、NET0、NET1、NET2、および NET3 のラベルが付いた、4 つの RJ-45 ネットワークコネクタがあります。これらのポートを使用して、サーバーをネットワークに接続します。Ethernet インタフェースは、100M ビット/秒、1000M ビット/秒、および 10000M ビット/秒で動作します。ポートの位置については、[11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。



注記

Oracle ILOM サイドバンド管理機能により、これらの Ethernet ポートの 1 つを使用すると、SP にアクセスできます。手順については、サーバーの管理ガイドを参照してください。

1. カテゴリ 5 (またはそれ以上) のケーブルを、ネットワークスイッチまたはハブからシャーシの背面にある Ethernet ポート 0 (NET0) に接続します。
2. 必要に応じて、カテゴリ 5 (またはそれ以上) のケーブルをネットワークスイッチまたはハブから残りの Ethernet ポート (NET1、NET2、NET3) に接続します。

関連情報

- 『サーバー管理』
- [第7章](#)

その他のデータケーブルを接続する

- サーバーにその他の I/O コンポーネントが構成されている場合は、外部ケーブルをこれらのコンポーネントにあるコネクタに接続します。

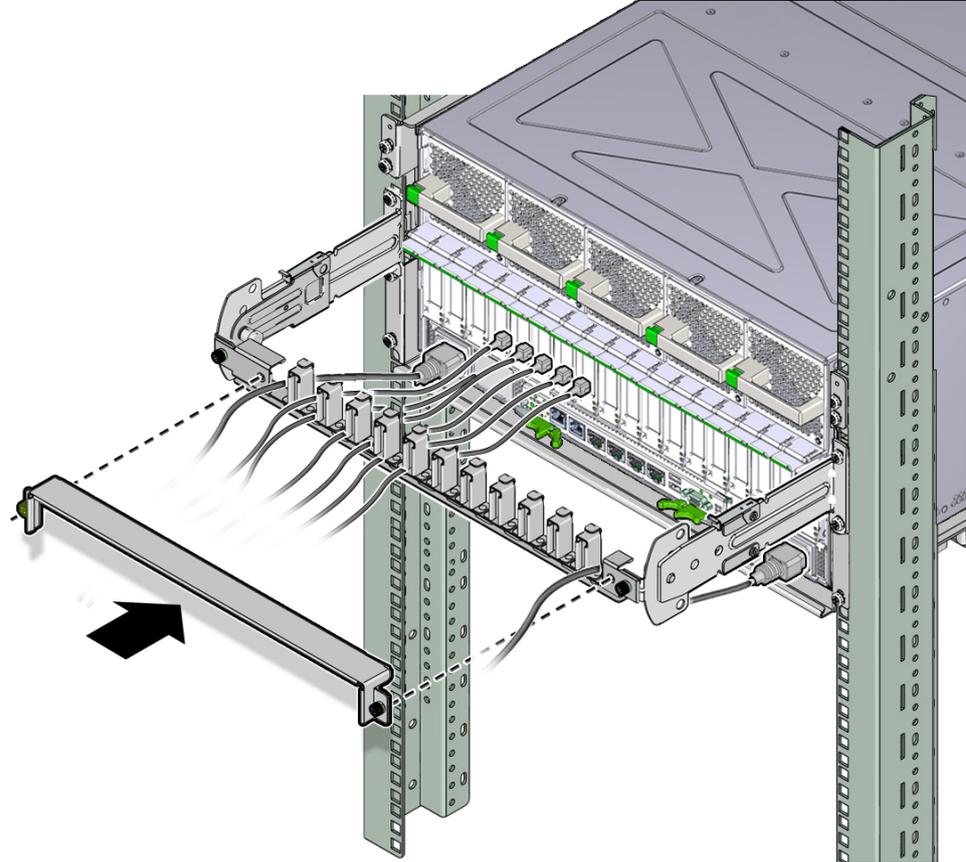
関連情報

- PCIe カードのドキュメント
- 『サーバーサービス』

CMA を使用してケーブルを固定する

CMA を使用してケーブルを固定し、ケーブルが正しくルーティングされるようにします。

1. CMA カバーを取り外します。
CMA カバーは、2 番のプラスのねじ 2 本で固定します。



2. システムケーブルを CMA の適切なスロットに配置します。
[第6章](#)を参照してください。
3. CMA カバーを取り付けます。
2 番のプラスのねじ 2 本を使用してカバーを固定します。

関連情報

- [33 ページの「CMA キット」](#)
- [37 ページの「配線の要件」](#)

サーバーへのはじめての電源投入

これらのトピックでは、はじめてサーバーに電源を投入し、Oracle Solaris OS を構成する手順について説明します。

手順	説明	リンク
1	電源コードを準備します。	47 ページの「電源コードを準備する」
2	SER MGT ポートにシリアル端末デバイスまたは端末サーバーを接続します。	48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」
3	サーバーに電源を投入して Oracle ILOM システムコンソールを起動します。	49 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」 または 52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」
4	プリインストールされている OS を構成するか、または新規 OS をインストールします。	52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」 または 54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」
5	Oracle Solaris OS の構成パラメータを設定します。	56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」
6 (オプション)	静的 IP アドレスを使用するように NET MGT ポートを構成します。	58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」

関連情報

- [第2章](#)
- [第5章](#)
- [42 ページの「データケーブルおよび管理ケーブルの接続」](#)

電源コードを準備する

電源コードを AC 電源からサーバーにルーティングして準備します。



注意

サーバー付属の電源コードのみを使用してください。



注意

サーバーをシリアル端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) に接続するまで、電源ケーブルを電源装置に接続しないでください。電源ケーブルで電源装置と外部電源を接続すると、ただちにサーバーがスタンバイモードになり、Oracle ILOM SP が初期化されます。電源を投入する前に端末または端末エミュレータを SER MGT ポートに接続していないと、システムメッセージは 60 秒後に表示されなくなる可能性があります。



注記

同時に両方の電源装置が接続されていない場合は、非冗長の状態になるため、Oracle ILOM がフォルト発生を通知します。この状況でのこのフォルトは気にしないでください。

- AC 電源からサーバー背面に電源コードをルーティングします。
この時点では、電源コードを電源装置に接続しないでください。

関連情報

- [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- [第7章](#)

SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する

はじめてサーバーの電源を投入する前に、端末または端末エミュレータから SP にシリアル接続を行います。このシリアル接続を行うと、電源コードの接続時にシステムメッセージを確認できます。

1. 次のタスクを完了していることを確認してください。
 - a. 設置の準備を完了した。
[第4章](#)を参照してください。
 - b. サーバーのラックへの設置を完了した。
[第5章](#)を参照してください。
 - c. 必要なケーブルを接続した。
[第6章](#)を参照してください。
2. 端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) をサーバーの SER MGT ポートに接続します。
3. 端末または端末エミュレータはこれらの設定で構成します。
 - 9600 ボー
 - 8 ビット
 - パリティなし
 - 1 ストップビット
 - ハンドシェイクなし

ヌルモデム構成である必要があります。つまり、DTE 間の通信では送信信号と受信信号が反転 (クロス) します。標準の RJ-45 ケーブルとともに付属の RJ-45 クロスアダプタを使用して、ヌルモデム構成を実現できます。



注記

サーバーにはじめて電源を入れるときに端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) が SER MGT ポートに接続されていないと、システムメッセージを確認できません。

4. (オプション) サーバーの NET MGT ポートと、SP およびホストにあとで接続されるネットワークとを、Ethernet ケーブルで接続します。
SER MGT ポートを通してはじめてシステムを構成します。初期構成のあと、この Ethernet インタフェースを介して SP とホストの間の通信を設定できます。
5. サーバーの NET ポートの 1 つと、サーバーが通信するネットワークとを、Ethernet ケーブルで接続します。
6. 電源コードを電源装置および別個の電源に接続します。
電源コードが接続されると、SP が初期化され、電源装置 LED が点灯します。数分後、SP ログインプロンプトが端末デバイスに表示されます。この時点では、ホストはまだ初期化されておらず、電源も入っていません。
7. サーバーにはじめて電源を入れて取り付けを続けます。
[49 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」](#)を参照してください。

関連情報

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

はじめてシステムの電源を入れる

1. 端末デバイスで、パスワード **changeme** を使用して、**root** として SP にログインします。

```
XXXXXXXXXXXXXXXXX login: root
Password: changeme
. . .
->
```

しばらくすると、Oracle ILOM プロンプト (->) が表示されます。最適なセキュリティのために、root パスワードは変更してください。パスワード変更、アカウントの追加、アカウント権限の設定などの管理タスクの詳細については、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。



注記

デフォルトでは、SP は DHCP を使用して IP アドレスを取得するように構成されています。静的 IP アドレスを SP に割り当てようとしている場合は、[58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)で詳細を確認してください。

2. 次のいずれかの方法を使用してサーバーの電源を投入します。
 - 電源ボタンを押します。
 - Oracle ILOM プロンプトで、次を入力します。

```
-> start /System
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

サーバーの初期化を完了するのに、数分かかることがあります。

初期化を取り消すには、#. (シャープ + ピリオド) キーを押して Oracle ILOM プロンプトに戻ります。その後次を入力します。**stop /System**



注記

Oracle ILOM 3.1 では、/SYS の名前空間は /System で置き換えられました。コマンドではいつでもレガシー名を使用できますが、レガシー名を出力で有効にするには、-> set /SP/cli legacy_targets=enabled で有効化する必要があります。詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

3. (オプション) ホスト出力をシリアル端末デバイスに表示するようにリダイレクトします。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /SP/console (y/n)? y
Serial console started.
. . .
```

4. (オプション) サーバーの初期化中に他の Oracle ILOM コマンドを実行できます。
 - a. Oracle ILOM プロンプトを表示するには、#. (シャープ + ピリオド) キーを押します。
 - b. 使用可能な Oracle ILOM コマンドに関する情報を表示するには、**help** を入力します。
特定のコマンドに関する情報を表示するには、help とコマンド名を入力します
 - c. サーバーの初期化からホスト出力の表示に戻るには、次を入力します。

```
-> start /HOST/console
```

5. OS をインストールして設置を続けます。
[52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [43 ページの「SER MGT ケーブルを接続する」](#)
- [51 ページの「Oracle ILOM システムコンソール」](#)
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)

- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

Oracle ILOM システムコンソール

電力がシステムにはじめて供給されると、Oracle ILOM システムコンソールの制御下でブートプロセスが開始されます。システムコンソールには、システムの起動中に実行されるファームウェアベースのテストで生成されたステータスメッセージおよびエラーメッセージが表示されます。



注記

これらのステータスメッセージとエラーメッセージを確認するには、サーバーに電力を供給する前に、SER MGT に端末または端末エミュレータを接続します。

システムコンソールによる低レベルのシステム診断が完了すると、SP が初期化され、より高いレベルの診断が実行されます。SER MGT ポートに接続されているデバイスを使用して SP にアクセスすると、Oracle ILOM 診断の出力が表示されます。

デフォルトでは、SP は DHCP を使用してネットワーク構成設定を取得し、SSH を使用した接続を許可するように、NET MGT ポートを自動的に構成します。

システムコンソールの構成と端末の接続の詳細については、サーバーの管理ガイドを参照してください。

関連情報

- 『サーバー管理』
- Oracle ILOM のドキュメント
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

OS のインストール

これらのトピックを使用して、プリインストールされている OS を構成するか、代替の OS を使用します。

- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

関連情報

- [56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)

プリインストールされている OS を構成する

1. 使用する OS を決定します。
 - プリインストールされている OS の使用を計画している場合は、手順 2 に進みます。
 - プリインストールされている OS を使用する計画がない場合は、[52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)に進んでください。
2. プロンプトが表示されたら、ホストで Oracle Solaris OS を構成するための画面上の手順に従います。

構成の確認を求めるプロンプトが数回表示されるため、そこで確認と変更を行うことができます。特定の値に応答する方法が不明である場合は、デフォルトを受け入れて、あとで Oracle Solaris OS が動作しているときに変更することができます。初期構成中に指定する必要がある Oracle Solaris OS パラメータについては、[56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)を参照してください。
3. サーバーにログインします。

これで、Oracle Solaris OS コマンドをプロンプトで入力できるようになりました。詳細は、次で Oracle Solaris 11 または 10 OS のマニュアルページおよびドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>
<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

関連情報

- [47 ページの「電源コードを準備する」](#)
- [48 ページの「SER MGT ポートに端末またはエミュレータを接続する」](#)
- [49 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」](#)
- [56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)

新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーがプリインストールされている OS からブートされないようにします。この代替手順は、[52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)の手順 5 を読んだあとで実行できます。

1. インストール方法に応じて適切なブートメディアを準備します。

OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、DVD メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートおよびインストールできます。

方法の詳細については、Oracle Solaris ドキュメントの次のセクションを参照してください。

 - 『*Oracle Solaris 11 システムのインストール*』、「インストールオプションの比較」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>
 - 『*Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)*』、「Solaris インストール方法の選択」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>
2. Oracle ILOM から、OpenBoot **auto-boot?** パラメータを **false** に設定します。

```
-> set /HOST/bootmode script="setenv auto-boot? false"
```

この設定では、プリインストールされている OS からサーバーがブートしなくなります。ホストの電源がリセットされていない場合に、**bootmode** を使用すると、変更は 1 回のブートにのみ適用され、10 分で期限切れになります。

- OS のインストールを開始する準備ができたなら、ホストをリセットします。

```
-> reset /System
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing reset on /System
```



注記

Oracle ILOM 3.1 では、/SYS の名前空間は /System で置き換えられました。コマンドではいつでもレガシー名を使用できますが、レガシー名を出力で有効にするには、-> set /SP/cli legacy_targets=enabled で有効化する必要があります。詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

- 通信をサーバーホストに切り替えます。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started. To stop, type #.
```

サーバーで POST を完了するまでに、数分かかることがあります。その後、**ok** プロンプトが表示されます。

- インストール方法に適したブートメディアからブートします。
詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

有効なブートコマンドの一覧を表示するには、次を入力します。

```
{0} ok help File
boot <specifier> ( -- ) boot kernel ( default ) or other file
Examples:
  boot                    - boot kernel from default device.
                          Factory default is to boot
                          from DISK if present, otherwise from
NET.
  boot net                - boot kernel from network
  boot cdrom              - boot kernel from CD-ROM
  boot disk1:h            - boot from disk1 partition h
  boot tape                - boot default file from tape
  boot disk myunix -as    - boot myunix from disk with flags "-as"
```

```
dload <filename> ( addr -- ) debug load of file over network at
address
Examples:
  4000 dload /export/root/foo/test
  ?go      - if executable program, execute it
           or if Forth program, compile it
```

関連情報

- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーがプリインストールされている OS をブートしないようにします。

1. インストール方法に応じて適切なブートメディアを準備します。
OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、DVD メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートし、インストールできます。
方法の詳細については、Oracle Solaris ドキュメントの次のセクションを参照してください。
 - 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>
 - 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」
<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>
2. まだ実行していない場合は、次のタスクを実行して、サーバー上の Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスします。
 - a. システムと同じネットワーク上にあるブラウザで、SP の IP アドレスを入力します。
 - b. ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle ILOM にログインします。
3. Oracle ILOM Web インタフェースの左のナビゲーションペインで、「Host Management」> 「Host Boot Mode」を選択します。
「Host Boot Mode」ページが表示されます。
4. 「Host Boot Mode Settings」に次の変更を適用します。
 - a. 「**State**」には、「**Reset NVRAM**」を選択します。
この設定では、スクリプトの設定に基づいて 1 回かぎりの NVRAM (OBP) の変更が適用され、次のホストリセット時に NVRAM がデフォルト設定にリセットされます。
 - b. 「**Script**」には、「**setenv auto-boot? false**」を入力します。
この設定では、プリインストールされている OS を自動的にブートする代わりに、**ok** プロンプトでホストが停止するように構成されます。
 - c. 「**Save**」をクリックします。



注記

次の手順の実行時間は 10 分です。10 分後に、自動的に通常の状態に戻ります。

5. 左のナビゲーションパネルで、「Host Management」>「Power Control」をクリックします。
6. プルダウンメニューから「Reset」を選択し、「Save」をクリックします。
7. 左のナビゲーションパネルで、「Remote Control」>「Redirection」をクリックします。
8. 「Use Serial Redirection」を選択し、「Launch Remote Console」をクリックします。
ホストがリセットされると、シリアルコンソールにメッセージが表示されます。リセットアクティビティが完了するまで数分かかります。**OK** プロンプトが表示されたら、次の手順に進みます。
9. OK プロンプトで、インストール方法に適したブートメディアからブートします。
詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

有効なブートコマンドの一覧を表示するには、次を入力します。

```
{0} ok help File
boot <specifier> ( -- )    boot kernel ( default ) or other file
Examples:
  boot                      - boot kernel from default device.
                           Factory default is to boot
                           from DISK if present, otherwise from
NET.
  boot net                  - boot kernel from network
  boot cdrom                - boot kernel from CD-ROM
  boot disk1:h              - boot from disk1 partition h
  boot tape                 - boot default file from tape
  boot disk myunix -as      - boot myunix from disk with flags "-as"
dload <filename> ( addr -- )  debug load of file over network at
address
Examples:
  4000 dload /export/root/foo/test
  ?go                       - if executable program, execute it
                           or if Forth program, compile it
```

関連情報

- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

- [58 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

Oracle Solaris OS の構成パラメータ

このトピックでは、Oracle Solaris OS の初期構成中に指定する必要がある構成パラメータについて説明します。

パラメータ	説明
Language	表示された言語の一覧から番号を選択します。
Locale	表示されたロケールの一覧から番号を選択します。
Terminal Type	使用している端末デバイスに対応する端末のタイプを選択します。
Network?	「Yes」を選択します。
Multiple Network Interfaces	構成する予定のネットワークインタフェースを選択します。不明な場合は、一覧の先頭を選択します。
DHCP?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Host Name	サーバーのホスト名を入力します。
IP Address	この Ethernet インタフェースの IP アドレスを入力します。
Subnet?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Subnet Netmask	Subnet? で「Yes」を選択した場合は、使用しているネットワーク環境のサブネットのネットマスクを入力します。
IPv6?	IPv6 を使用するかどうかを指定します。不明である場合は、「No」を選択して IPv4 用の Ethernet インタフェースを構成します。
Security Policy	標準の UNIX セキュリティー (No) または Kerberos セキュリティー (Yes) のいずれかを選択します。不明である場合は、「No」を選択します。
Confirm	画面上の情報を確認し、必要に応じて変更します。それ以外の場合は、続行します。
Name Service	使用しているネットワーク環境に応じて、ネームサービスを選択します。 注 - 「None」以外のネームサービスを選択すると、追加のネームサービスの構成情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。
NFSv4 Domain Name	使用している環境に応じて、ドメイン名構成のタイプを選択します。不明な場合は、「 Use the NFSv4 domain derived by the server 」を選択します。
Time Zone (Continent)	該当する大陸を選択します。
Time Zone (Country or Region)	該当する国または地域を選択します。
Time Zone	タイムゾーンを選択します。
Date and Time	デフォルトの日付と時間を受け入れるか、値を変更します。
root Password	root パスワードを 2 回入力します。このパスワードは、このサーバーの Oracle Solaris OS のスーパーユーザーアカウント用です。このパスワードは、SP のパスワードではありません。

関連情報

- Oracle Solaris OS のドキュメント
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

静的 IP アドレスの SP への割り当て

ネットワークが DHCP を使用しない場合は、SP のネットワーク設定を構成するまで、NET MGT ポートは動作しません。



注記

使用しているネットワーク上で DHCP を使用できない場合は、SER MGT ポートを使用して ILOM SP に接続し、使用しているネットワークの NET MGT ポートを構成してください。[58 ページ](#)の「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」を参照してください。

- [57 ページ](#)の「SP にログインする (SER MGT ポート)」

関連情報

- [51 ページ](#)の「Oracle ILOM システムコンソール」
- [56 ページ](#)の「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」
- [57 ページ](#)の「SP にログインする (SER MGT ポート)」
- [58 ページ](#)の「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」

SP にログインする (SER MGT ポート)

SP がブートしたら、ILOM CLI にアクセスしてサーバーの構成および管理を行います。SP をはじめてブートしたときに、ILOM CLI プロンプト (->) が表示されます。デフォルトの構成では、**root** という ILOM CLI ユーザーアカウントが提供されています。デフォルトの **root** パスワードは、*changeme* です。SP ILOM CLI の `password` コマンドを使用してパスワードを変更します。

1. これがサーバーへのはじめての電源投入の場合は、**password** コマンドを使用して **root** パスワードを変更します。

```
hostname login: root
Password:
Last login: Mon Feb 18 16:53:14 GMT 2013 on ttyS0
Detecting screen size; please wait...done

Oracle(R) Integrated Lights Out Manager

Version 3.2.1.2 rxxxxx

Copyright (c) 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights
reserved.
Warning: password is set to factory default.

-> set /HOST/users/root password
Enter new password: *****
Enter new password again: *****

->
```



注記

root パスワードを設定すると、それ以降のリブートでは ILOM CLI ログインプロンプトが表示されます。

2. ログイン名として **root** を入力し、続けてパスワードを入力します。

```
...
hostname login: root
Password: password (nothing
displayed)

Oracle(R) Integrated Lights Out Manager

Version 3.2.1.2

Copyright (c) 2013 Oracle and/or its affiliates. All rights
reserved.
->
```

関連情報

- ・ 『サーバー管理』
- ・ [11 ページの「背面パネルのコンポーネント」](#)
- ・ [37 ページの「配線の要件」](#)
- ・ Oracle ILOM のドキュメント

静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる

NET MGT ポートから SP に接続する予定の場合は、SP に有効な IP アドレスが存在する必要があります。

デフォルトでは、サーバーは、ネットワークの DHCP サービスから IP アドレスを取得するように構成されています。サーバーが接続されているネットワークが IP アドレス指定を行う DHCP をサポートしていない場合は、次の手順に従います。

DHCP をサポートするようにサーバーを構成するには、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

1. 静的 IP アドレスを受け入れるように SP を設定します。

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=static
Set 'pendingipdiscovery' to 'static'
```

2. SP の IP アドレスを設定します。

Oracle ILOM は、IPv4 DHCP および IPv6 ステートレスのデフォルトネットワーク設定で出荷されます。

- a. デフォルトの IPv4 DHCP プロパティを変更して静的 IPv4 アドレスのプロパティ値を設定するには、**IPv4_address** と入力します。

- b. デフォルトの IPv6 DHCP プロパティを変更して静的 IPv6 アドレスのプロパティ値を設定するには、IPv6_address と入力します。

この設定では、プリインストールされている OS を自動的にブートする代わりに、**ok** プロンプトでホストが停止するように構成されます。

```
-> set /SP/network pendingipaddress=service-processor-IPAddr
Set 'pendingipaddress' to 'service-processor-IPAddr'
```

デフォルトのネットワーク接続設定の変更などの管理タスクの詳細については、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

3. SP ゲートウェイの IP アドレスを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipgateway=gateway-IPAddr
Set 'pendingipgateway' to 'gateway-IPAddr'
```

4. SP のネットマスクを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipnetmask=255.255.255.0
Set 'pendingipnetmask' to '255.255.255.0'
```

この例では、**255.255.255.0** を使用してネットマスクを設定します。ご使用のネットワーク環境のサブネットでは、異なるネットマスクが必要になる場合があります。使用している環境にもっとも適したネットマスク番号を使用してください。

5. 保留中のパラメータが適切に設定されたことを確認します。

```
-> show /SP/network
/SP/network
Targets:
Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  dhcp_clientid = xxx.xxx.xxx.xxx
  dhcp_server_ip = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipaddress = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipdiscovery = dhcp
  ipgateway = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipnetmask = 255.255.255.0
  macaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx
  managementport = MGMT
  outofbandmacaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx
  pendingipaddress = service-processor-IPAddr
  pendingipdiscovery = static
  pendingipgateway = gateway-IPAddr
  pendingipnetmask = 255.255.255.0
  pendingmanagementport = MGMT
  sidebandmacaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx
  state = enabled
```

6. SP のネットワークパラメータに対する変更を設定します。

```
-> set /SP/network commitpending=true
Set 'commitpending' to 'true'
```



注記

show /SP/network コマンドをもう一度実行し、パラメータが更新されたことを確認できます。

7. Oracle Solaris OS を構成するときの静的 IP アドレスを設定します。
[52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- 『サーバー管理』
- [52 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [52 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [54 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [56 ページの「Oracle Solaris OS の構成パラメータ」](#)
- Oracle ILOM のドキュメント

用語集

A

ANSI SIS	American National Standards Institute Status Indicator Standard.
ASF	警告標準フォーマット (Netra 製品のみ)。
AWG	米国ワイヤゲージ規格。

B

ブレード	サーバーモジュールおよびストレージモジュールの一般名称。 サーバーモジュール および ストレージモジュール を参照してください。
ブレードサーバー	サーバーモジュール。 サーバーモジュール を参照してください。
BMC	Baseboard Management Controller.
BOB	Memory Buffer On Board (オンボードのメモリーバッファー)。

C

シャーシ	サーバーの場合は、サーバーのエンクロージャーを指します。サーバーモジュールの場合は、モジュラーシステムのエンクロージャーを指します。
CMA	ケーブル管理部品。
CMM	シャーシ監視モジュール (サーバーモジュールのみ)。CMM はサーバーモジュールが搭載されたモジュールシステム内のサービスプロセッサです。Oracle ILOM は CMM 上で動作して、モジュラーシステムシャーシ内のコンポーネントの電源管理 (LOM) を提供します。 モジュラーシステム および Oracle ILOM を参照してください。
CMP	チップマルチプロセッサ。

D

DHCP	動的ホスト構成プロトコル。
ディスクモジュール、またはディスクブレード	ストレージモジュールの別名。 ストレージモジュール を参照してください。
DTE	Data Terminal Equipment (データ端末装置)。

E

EIA	Electronics Industries Alliance (米国電子工業会)。
ESD	静電放電。

F

FEM ファブリック拡張モジュール (サーバーモジュールのみ)。FEM により、サーバーモジュールは特定の NEM によって提供される 10GbE 接続を使用できます。[NEM](#) を参照してください。

FRU 現場交換可能ユニット。

H

HBA ホストバスアダプタ。

ホスト Oracle Solaris OS およびその他のアプリケーションを実行する、CPU およびその他のハードウェアを備えたサーバーまたはサーバーモジュールの部分。**ホス**という用語は、プライマリコンピュータと SP を区別するために使用されます。[SP](#) を参照してください。

ホットプラグ可能 電力が供給された状態で交換可能なコンポーネントを表しますが、コンポーネントを取り外す準備が必要です。

ホットスワップ可能 電力が供給された状態で交換可能なコンポーネントを表し、準備の必要はありません。

I

ID PROM サーバーまたはサーバーモジュールのシステム情報が格納されたチップ。

IP Internet Protocol (インターネットプロトコル)。

K

KVM キーボード、ビデオ、マウス。複数のコンピュータで 1 つのキーボード、1 つのディスプレイ、1 つのマウスを共有するには、スイッチの使い方を参照してください。

L

LwA 音響パワーレベル。

M

MAC マシンアクセスコード。

MAC アドレス メディアアクセス制御アドレス。

モジュラーシステム サーバーモジュール、ストレージモジュール、NEM、および PCI EM を収納するラックマウント可能シャーシ (サーバーモジュールのみ)。モジュラーシステムは、その CMM を介して Oracle ILOM を提供します。

MSGID メッセージ識別子。

N

名前空間 最上位の Oracle ILOM ターゲット。

NEBS	ネットワーク機器構築システム (Netra 製品のみ)。
NEM	ネットワークエクスプレスモジュール (サーバーモジュールのみ)。NEM はストレージモジュールへの Ethernet 接続および SAS 接続を提供します。
NET MGT	ネットワーク管理ポート。サーバー SP、サーバーモジュール SP、および CMM 上の Ethernet ポート。
NIC	Network Interface Card/Controller (ネットワークインタフェースカードまたはネットワークインタフェースコントローラ)
NMI	マスク不可能割り込み。
O	
OBP	OpenBoot PROM。OBP は、OpenBoot との関係を示すためにファイル名およびメッセージで使用されることがあります。
Oracle ILOM	Oracle Integrated Lights Out Manager。Oracle ILOM ファームウェアは、各種 Oracle システムにプリインストールされています。Oracle ILOM を使用すると、ホストシステムの状態に関係なく、Oracle サーバーをリモートから管理できます。
Oracle ILOM CMM	CMM で動作する Oracle ILOM (サーバーモジュールのみ)。 Oracle ILOM を参照してください。
Oracle Solaris OS	Oracle Solaris オペレーティングシステム。
P	
PCI	Peripheral Component Interconnect。
PEM	PCIe Express Module (サーバーモジュールのみ)。PCI Express の業界標準フォームファクタに基づくモジュラーコンポーネントで、ギガビット Ethernet やファイバチャネルなどの I/O 機能を提供します。
POST	電源投入時自己診断。
PROM	プログラム可能な読み取り専用メモリー。
PSH	予測的自己修復。
R	
REM	RAID 拡張モジュール (サーバーモジュールのみ)。HBA とも呼びます。 HBA を参照してください。ドライブへの RAID ボリュームの作成をサポートします。
S	
SAS	Serial Attached SCSI。
SCC	System Configuration Chip (システム構成チップ)。
SER MGT	シリアル管理ポート。サーバー SP、サーバーモジュール SP、および CMM 上のシリアルポート。

サーバーモジュール	モジュラーシステムで主要な演算リソース (CPU とメモリー) を提供するモジュラーコンポーネント。サーバーモジュールには、オンボードストレージおよび FEM を保持するコネクタがある場合もあります。
SP	サービスプロセッサ。サーバーまたはサーバーモジュールの SP は、専用の OS を搭載したカードです。SP は Oracle ILOM コマンドを処理し、ホストの電源管理 (LOM) を提供します。 ホスト を参照してください。
SSD	Solid-State Drive (半導体ドライブ)。
SSH	Secure Shell。
ストレージモジュール	サーバーモジュールに演算ストレージを提供するモジュラーコンポーネント。
T	
TIA	Telecommunications Industry Association (米国通信工業会) (Netra 製品のみ)。
Tma	最大周囲温度。
U	
UCP	Universal Connector Port (ユニバーサルコネクタポート)。
UI	ユーザーインターフェース。
UL	Underwriters Laboratory Inc.
U.S. NEC	United States National Electrical Code (米国電気工事基準)。
UTC	協定世界時。
UUID	Universal Unique Identifier (汎用一意識別子)。
W	
WWN	World Wide Name。SAS ターゲットを一意に特定する番号。

索引

あ

奥行の仕様, 13
音響仕様, 15

か

環境仕様, 15
ギガビット Ethernet ポートのピン配列, 41
ケーブル管理部品
 CMA を参照, 32
高度仕様, 14, 15
互換性のあるラック, 21, 21
コンポーネント
 背面, 11

さ

サーバー
 概要, 10
 設置, 31
サービスプロセッサ
 SER MGT ポートでのアクセス, 57
最小のケーブル接続, 37
サイト計画仕様, 13
湿度仕様, 15
重量の仕様, 13
出荷キットの内容, 17
仕様
 音響, 15
 確認, 13
 環境, 15
 高度, 15
 サイト計画, 13
 湿度, 15
 重量, 13
 衝撃, 15
 振動, 15
 高さ, 13
 電気, 14
 幅, 13
 物理, 13
シリアルケーブル用のアダプタ, 43
シリアル端末設定, 48
シリアル端末のパリティ, なし, 48
シリアル端末のハンドシェイク, なし, 48
シリアル端末のビット設定, 48
シリアル端末のボーレート, 48
診断
 実行時, 51
振動仕様, 15
スタンバイ
 モード, 48
スタンバイモード, AC 接続時, 38
ストップビット, 48

スロット、ポート、および LED の図, 11
設置
 サーバーをラックへ, 31
 タスクの概要, 9
 ラックマウントキット, 24

た

高さの仕様, 13
注意事項、取り扱い, 18
通気
 ガイドライン, 15
 必要なスペース, 15
通気のガイドライン, 15
電気仕様, 14
電源コード、配線, 47
電源ボタン
 位置, 11
転倒防止脚または転倒防止バー, 24
電力計算機能, 14
電力仕様, 37
ドライブ, 10
取り扱い上の注意, 18
取り付け
 CMA, 32
 ラックマウント部品, 27

は

配線
 CMA に固定, 45
 Ethernet ポート, 44
 NET MGT ポート, 43
 SER MGT ポート, 43
 シリアルデータケーブル用のアダプタ, 43
 電源コード, 47
 必要な接続, 37
背面パネル
 コンポーネント, 11
幅の仕様, 13
必要なスペース
 通気, 16
 保守, 16
ビデオコネクタ
 説明, 10
 前面, 11
 背面, 11
 ピン配列, 41
ピン配列
 Ethernet ポート, 38
 NET MGT ポート, 40
 SER MGT ポート, 39
 USB ポート, 38, 38
 ギガビット Ethernet ポート, 41
 ビデオコネクタ, 38, 41
物理, 13
放熱量仕様, 14
ポート、スロット、および LED の位置 (図), 11

ポート、スロット、および LED の図, 11
保守のために必要なスペース, 13
ホットプラグ対応 USB ポート, 38

ま

メッセージの保持、制限, 38
モデムを SER MGT シリアル管理ポートで使用しない,
43

や

用語
スライドレールの組み立て, 24

ら

ラック
互換性, 21
固定, 24
注意事項, 22
取り付け穴、サポート, 22
ラック、互換性, 21
ラック、サポート, 21
ラックマウント, 21
安全に関する警告, 22
サーバーの準備, 20
転倒防止脚または転倒防止バー、伸ばす, 24
部品の取り付け, 27
ラックの固定, 24

アルファベット

admin ログイン、パスワード設定, 57
CMA
キット, 32
ケーブルの固定, 45
取り付け, 32
必要な部品, 32
DHCP, 43
DIMM
DIMM の説明, 10
DVD ドライブ, 10
ESD に関する注意事項, 19
Ethernet ポート, 10
配線, 37
ピン配列, 37
IP アドレス
SP, 56
LED、ポート、およびスロットの図, 11
NET MGT ポート
DHCP, 43
位置, 43
静的 IP アドレス, 43
配線, 43
ピン配列, 40, 43
Oracle ILOM, 51
Oracle Solaris OS
構成パラメータ, 56

新規 OS のインストール (Oracle ILOM CLI), 52
新規 OS のインストール (Oracle ILOM Web イン
タフェース), 54
プリインストールされている OS の構成, 51
password コマンド, 57
RJ-45 ケーブル, 37
SER MGT ポート
最初の電源投入, 48
配線, 48
ピン配列, 39
SP へのログイン
SER MGT ポートの使用, 57
USB ポート, 10
前面, 11
背面, 11
ピン配列, 39